

「保健室で行う健康相談」

—養護教諭の『タッチ』『デートDV防止教育』の視点から—

令和4年12月9日（金）午後3時00分～午後5時00分

愛知学院大学 心身科学部 健康科学科 教授 下村 淳子 氏

養護教諭が行う健康相談について、研究データをもとに教えていただくとともに、デートDV防止教育の実際についてもお話を伺いました。養護教諭としてご勤務されていた下村先生だからこそのお話を聴かせていただきました。



1 養護教諭の行う健康相談

保健室に来室する児童生徒に対して行う健康相談は、まずは初期診断をするために、器質的なものかどうかを判断する。健康相談は「相談」という名前が付くので心の方に捉えがちであるが、体の方を診て触れて、器質的な疾患がないか除外診断をしなければならない。来室の回数や頻度から、心因性のものであるかを疑うのではなく、何度来ようが毎回きちんと心身の観察をする。養護教諭は子どもたちに触れることができ、しかも医学的知識をもっている。これらを活かして、生活習慣とも関連付けたうえで、的確に判断して対応しなければならない。養護教諭の行う健康相談は、「観て触れて、診て護る」ものであり、継続的な見護り、関係者とのよりよい連携・支援、再発防止におけた保健指導も大切である。

2 タッチ（触）と健康相談

手を当てると痛みが和らぐのは、オキシトシン（愛情ホルモン）の効果と言われている。触ったり触られたりすると、オキシトシンの分泌が促進されるが、特に触る人の方がよく分泌される。また、オキシトシンの分泌により、ストレス物質であるコルチゾールの分泌が抑制される。ご自身の研究より、養護教諭を対象としたイメージの調査では、来室する子どもへの言葉の関わりは校種による違いはないが、触れる関わりは小学校から高等学校にかけて少しずつ減っていく。保健室での観察調査では、子どもに触れる場所は手、背中、肩が多く、養護教諭の立ち位置は子どもから見て左斜め前が多かった。養護教諭と子どもとの一般的な距離は、手を伸ばせば届く程度（45cm～75cm）だった。養護教諭にも子どもにも適切な距離があり、一人一人に合わせて考えて使い分けている。また、タッチは会話から始め、声掛けをしてから触れるようなプロセスが必要である。養護教諭は触れなければいけない時には触れた方がよいが、触れられることにより安心したい子ども、触覚抵抗性のある子ども、触れたくない養護教諭もいるだろう。触れられなくても、信頼できる相手（養護教諭、学級担任、保護者など）からの気持ちのこもった声掛け、問掛けによってもオキシトシンが分泌され、十分な効果がある。

3 デートDV防止教育

大人に翻弄され性の被害者になったり、純粹無垢が故にいいようにあしらわれたりする若者たちがいる。子どもたちが置かれている実態を知り、目の前にいる子どもたちが、暴力を容認するようなコミュニケーションを取らなくてもよいように、発達段階に応じてもっと手厚い教育・啓発活動が必要である。交際の経験をする前に、正しいコミュニケーションの在り方を学んでほしいが、10代を対象としたデートDV防止予防教材は少ないという課題があった。そこで、支配しない・されない対応の仕方や、自分を出して発言できるようにアサーションを使い、望ましいコミュニケーションの取り方を学べる教材を作成した。自校ならではの場面設定ができると、子どもたちに自分事として、そして実際にある事として考えさせることができる。

4 まとめ

健康相談の中で、タッチは「観て触れて、診て護る」の「触れる」の部分であり、再発防止に向けた保健指導に繋がる。養護教諭が日頃行っていることすべてが健康相談に繋がっている。養護教諭としての経験や知識を活かして、自校の子どもたちに合わせた健康相談に取り組んでもらいたい。